森と海からの手紙

★3便★

長野・信濃「アファンの森」

初夏 フクロウも巣立ち

豊かな生態系広がる証し

時代のすう勢とともに、接する機会が少なくなった言葉に「森羅万象」がある。

日本人は古来、「天と地の間に存在する全ての存在や事象」を、「森」という字を使って表現してきた。しかし、天災や気象変動を除いて、人と自然の距離が乖離（かいり）していく昨今は、人が森に身を置く機会も激減。日夜、繰り広げられている森の生き物たちの営みは、人々の日常から遠ざかっていった。

「フクロウの巣立ちが間近です」。長野県信濃町、新潟との県境に連なる山のふもとに広がる「アファンの森」のスタッフからの知らせに、森に通うこと5日目の5月21日の昼下がり。

杉の幹の6㍍ほどの高さに設営された巣箱から、フワフワの白っぽい羽をまとったヒナが顔をのぞかせていた。

足音を忍ばせながら森に分け入ったつもりだったが、ちん入者にいち早く気づいたウグイスが「ケキョ、ケキョ、ケキョ」と警戒の声を上げた。そのせいか、けげんそうに小首をかしげている。

アファンの森はかつて、伐採後に放置されて草木が密集し、昼でも薄暗く「幽霊森」と呼ばれていた。

ナチュラリストの故C・W・ニコルさんらが「森を再生させよう」と手入れを始めたのは36年前だ。今では、東京ドーム7個分を超える広さに、1540種類の動植物が生息する森になった。

本州では、ツキノワグマが獣の頂点に君臨しているように、フクロウはタカと並んで鳥類の最上位に位置する。クマやフクロウが存在することは、豊かな生態系が広がっている証しなのだ。

フクロウは夜行性の猛きん類で、里山や視界の開けた森を好む。羽を広げると1㍍以上。ネズミ類や小鳥などの小動物をエサとし、上空から近づいて鋭い爪で捕獲するため、羽を広げて飛ぶことができる空間が必要となる。

営巣は、古木に開いたウロ（樹洞）を使う。かつては、ウロのある大きな木が残る社寺林や屋敷林などで目撃された。しかし、ウロのある大木が伐採されたことや、里山の過疎化や林業の衰退に伴い生息地が減って、目にする機会も減った。

アファンでは、古い木でも樹齢は60年足らず。ウロは、成長が早いシラカバに確認されただけだった。

フクロウのために巣箱の設置を始めたのは、1995年からだ。4年後にヒナが目撃され、2002年以降は毎年のように2、3羽のヒナを確認。シラカバのウロと合わせ、39羽が巣立ちした。

「巣立ちと言っても、最初は飛べずに、地べたに落ちます。落ちては、その鋭い爪で木をよじ登り、また落ちる。その繰り返しです。その間は、親鳥がエサを運びます。ひと月ほどたって、飛び方と捕食のやり方を身に付けてから、親元から離れていきます」。アファンのスタッフから教わった。

昨年は、フクロウが巣立って空き家になった巣箱に、スズメバチが巣をこしらえた。秋には、冬眠前のクマが木を登り、巣箱を破壊してハチの子を平らげた。クマも鼻頭を刺されると激痛が走るはずだが、滋養たっぷりのハチの子には目がないらしい。

春から夏にかけて、森は生殖の季節を迎える。

アファンにある小さな池で、モリアオガエルが交尾をしたのは、フクロウのヒナを見つけた日の前夜だった。池に張り出した木の枝で、産卵するメスの背中に数匹のオスが群がって、射精する。メスはオスの1・5倍ほどの大きさで、その背後から何匹ものオスが群がる。

枝に産み付けられた卵は、マシュマロのように白くてフワフワの泡に包まれ、6日ほどでふ化し、オタマジャクシになって池に落ちる。おこぼれにあずかろうと、下で口を広げて待ち構えるのはイモリ。カエルやオタマジャクシの天敵で、そのイモリは、サギやヘビのエサとなる。

巣を作らず、他の鳥の巣に卵を産んで子育てをさせるちゃっかりものの鳥もいる。ホトトギスやカッコウたちだ。ウグイスやミソサザイの親鳥がエサを取りに巣を離れたすきに、卵を産み付ける。その際、巣にあった卵を1個捨てる。ふ化したヒナもほかの卵やヒナを巣外に追い出し、巣を独占するという。

フクロウの後日談も、記しておく。最初に目撃して以来、ヒナは姿を消した。巣箱の様子を記録し続けているムービーカメラの画像をチェックすると、目撃した日の深夜にヒナをくわえたテンの姿が確認された。

「テンが登れない仕掛けを付けたらいかがですか」

アファンで鳥類調査を続ける川崎公夫さんに問うと、こんな言葉が返ってきた。

「人が一時的な感傷で、むやみに手を加えると、自然界はバランスを崩してしまいます。生き物たちは、調和の中で生きているのです」

上巣箱から顔を出したフクロウ下交尾を終えたモリアオガエル＝いずれも長野県信濃町のアファンの森で

【客員編集委員・萩尾信也】

＝毎月第3火曜掲載